

[第10回]

# NCGG-RI 研究発表会

National Center for Geriatrics and Gerontology, Research Institute

## 白質病変による認知症の発病機構

バイオリソース研究室

矢澤 生 室長

2016年6月14日(火) 16時30分  
第1研究棟2階大会議室

高齢者に起こる認知症では、中枢神経にさまざまなタンパク質が蓄積して神経細胞の脱落が起こる神経変性疾患が重要です。この神経変性疾患では、主として大脳皮質の神経細胞にタンパク質が蓄積して、神経細胞の変性をきたします。一方、中枢神経の白質に存在する細胞やその突起に、タンパク質が蓄積して神経細胞の変性が起こる疾患があり、今日注目されています。白質病変による認知症の臨床症状は、皮質型の認知症、例えばアルツハイマー病の認知機能低下の症状とは異なることが指摘されていますが、発病機構については多くの点が未解明です。バイオリソース研究室では病理解剖による脳組織の診断から発病に関するメカニズムを検討し、治療標的を明らかにして、神経変性に対する根本的治療法の開発をめざしています。本セミナーでは、白質に起こるタンパク質の蓄積の病態がどのように神経細胞の変性をきたすのか、その概略について紹介します。遺伝性及び非遺伝性の神経変性疾患について、病理形態学的な診断や組織所見から、発病機構の仮説をたて、疾患モデルを作製して病態解明を行い、治療標的を明らかにする方法を検討します。

座長：徳永 暁憲